

「江戸名所花暦」に見るサクラの名所と花見の様相

桐蔭横浜大学 油井正昭

1. はじめに

江戸幕府は、1625年（寛永2年）に江戸城北東の守護を兼ね、幕府の祈願所として上野忍ヶ岡に東叡山寛永寺を創建した。この寛永寺境内に多数のサクラを植栽したため、やがて東叡山寛永寺は江戸第一のサクラの名所として親しまれるようになった。

江戸は開府された1603年（慶長8年）当時は、江戸城が海岸の波打ちぎわにあり、一帯は低湿地が多い土地であったが、急速に活気のある都市へ発展した¹⁾。江戸市中の社寺や景勝地は、市民の行楽の対象地になり、こうした名所の紹介本が種々出版されたため、名所は行楽地として賑わいを見せた。江戸の名所紹介本としては、江戸前期には「江戸名所記（1662）」「紫一本（1683）」「江戸鹿子（1687）」「江戸惣鹿子（1693）」などがあり、江戸中期には「江戸砂子（1732）」「続江戸砂子（1735）」など、江戸後期では「江戸名所花暦（1827）」「江戸名所図会（1836）」「江戸名所百景（1856）」などをあげることができる。「江戸鹿子」あたりから名所の内容が種類別に分類され²⁾、樹木は大樹や古木などの名木が紹介され、銘木観賞の行楽が盛んになるとともに名木として紹介される樹種や箇所数も増えた。

江戸後期に出た「江戸名所花暦」は、江戸市中の様々な種類の花の名所を紹介し、サクラの名所も数多く載せている。サクラの場合は植栽後年月が経過すると観賞性が向上することから、江戸後期にはサクラの名所が多くなっていたと考えられる。サクラの名所数とサクラ以外の花の名所数を比較すると、サクラの名所数が最も多く、春の行楽にサクラの花見の人気の高かったことを示している。

江戸のサクラの名所に関しては、相関芳郎の「東京のさくら名所今昔」²⁾、東京市役所が編纂した「東京市史稿遊園篇第一」³⁾などがあるが、「東京のさくら名所今昔」は江戸時代以降のサクラの名所紹介、「東京市史稿遊園篇第一」は江戸時代の名所紹介本の記述を集めたもので、両者とも名所の場所や分布の特徴、花見の様相に関しては考察していない。これらのことをふまえ、本論は「江戸名所花暦」⁴⁾に取り上げられたサクラの名所の特徴と花見の様相を考察することを目的とする。

2. 「江戸名所花暦」に見る名所と特徴

「江戸名所花暦」は、1827年（文政10年）に岡山鳥が花鳥風月の名所を四季に分けて紹介し、長谷川雪旦が25枚の挿絵を描いた図書である。その年の秋には第2版が出され、1837年（天保8年）に第3版が出された⁴⁾のを見ると、名所紹介本として評判の良い本であったと思われる。

「江戸名所花暦」が紹介した名所を整理したのが表-1で、合計43種類178箇所を紹介している。四季別に見ると春の部は80箇所と最も多くの名所を紹介し、この中にサクラの名所が46箇所ある。したがって、サクラの名所は春の部の半数以上、全体の4分の1以上を占め、江戸にはサクラの名所が多かったことが理解される。「江戸名所花暦」はサクラの名所を、上野東叡山の10箇所、彼岸桜の名所11箇所、東叡山と彼岸桜の名所以外25箇所と3つに分けて紹介しており、上野東叡山は格別なサクラの名所だったことが分かる。紹介している箇所が多いことは、サクラの名所は市民の関心が高かったことを物語る。

「江戸名所花暦」のサクラの名所位置を、東京都の地図にプロットしたのが図-1である。サクラの名所地は、多くが江戸城から5km以内の地域にあり、現在の文京区、台東区あたりに集中している。江戸城から10kmを超えているのは、唯一泊まりがけで行くサクラの名所として取り上げた玉川上水堤のみで、

ここは現在の小金井市と小平市の境界に位置している。玉川上水堤に対しては、往路、復路、宿のことを詳細に紹介し、江戸市中から遠い場所ではあるが、市民の中に泊まりがけで花見に行く程の行楽熱が高かったことを知ることができる。

「江戸名所花暦」が紹介した46箇所を整理したのが表-2である。サクラの名所は、社寺境内が最も多く36箇所（約8割）、丘陵地5箇所、河川堤2箇所、個人邸宅2箇所、新吉原である。この中には享保年間に吉宗の命でサクラが植栽された飛鳥山、隅田川堤、御殿山がある。新吉原は、日常は吉原の中心道路である所へ、毎年3月朔日に開花したサクラを植え込む特殊な名所である。なお、「江戸名所花暦」が紹介したサクラの名所のうち、上野や飛鳥山は現在も花見で賑わう公園として存在し、また白山神社旗桜、延乗寺右衛門桜、渋谷八幡宮金王桜などその後も植え継がれて存続している場所が何箇所かあるが、大半は時代の変遷過程で失われてしまった。

3. サクラの花見の様相

「江戸名所花暦」のサクラの名所紹介文には、花見の様子はほとんど書かれていないが、上野東叡山、隅田川（2景）、新吉原、飛鳥山、金井橋に長谷川雪旦が描いた6枚の挿絵があり、その中の隅田川、飛鳥山、金井橋などに花見の様相が描かれている。

名所の紹介文で花見の様相が少し詳しいのは、上野東叡山の説明である。上野東叡山は花見客が集中し、黒門から先はなかなか進めない状態だった。清水観音堂の裏手あたりは、花見客が木から木へ幕を張り、多いときは300を超えた。この他にも連れ立ってきた女房の小袖や男の羽織に弁当を結わえてきた紐を通してサクラの木に結んで幕の代わりにしている人も多く、持参した毛氈や花むしろを敷き、酒肴を楽しんでいる。上野東叡山は琴や三弦など鳴り物は禁止されているが、小唄、浄瑠璃、踊りなどは咎められないため、唄ったり踊ったりの賑やかな花見である。花見には上等な小袖を新調して着飾って来ており、こち

表-1 「江戸名所花暦」が取り上げた名所

分類	箇所数	分類	箇所数	分類	箇所数	分類	箇所数
(春之部)		(夏之部)		(秋之部)		(冬之部)	
鶯	4	藤	9	牽牛花	1	寒菊	3
梅	10	躑躅	4	草	1	水仙	6
椿	5	郭公	4	萩	2	寒梅	4
桃	5	牡丹	5	月	5	山茶花	-
桜(東叡山)	10	椿	1	虫	1	枇杷	-
彼岸桜	11	杜若	3	菊	2	茶の花	-
桜	25	卯花	2	紅葉	8	連理楠	1
梨花	3	橘	1			松	4
山吹	3	水鶏	2			枯野	1
葦草	2	合歡木	5			千鳥	3
桜草	2	螢	5			雪	9
		蓮	3				
		納涼	2				
		荒和祓	1				
11分類	80	14分類	47	7分類	20	11分類	31

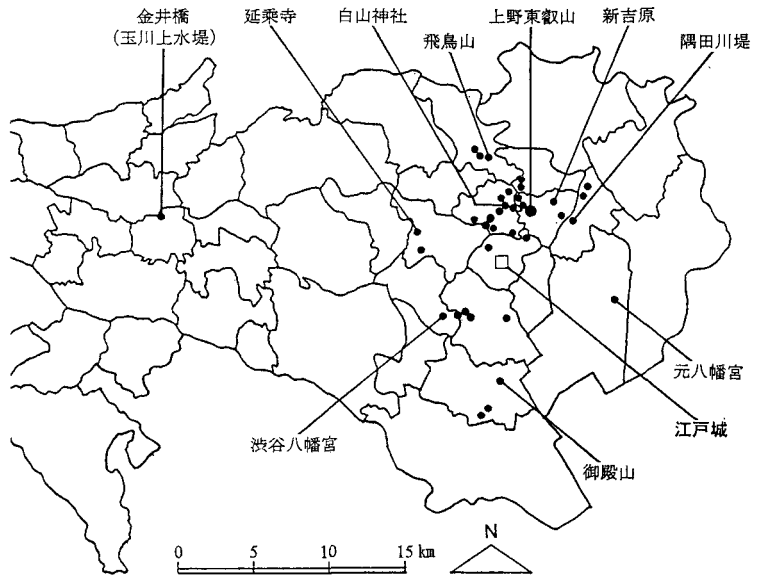


図-1 「江戸名所花暦」のサクラの名所分布

らの方が花より見事な程であった。また、花見時期は昼過ぎに雨が降ることが多かったが、傘を差さずに小袖を濡らして帰ることが遊山（花見）に行ってきた手柄にする風潮があった。

図-2は「江戸名所花暦」の飛鳥山の花見風景である。飛鳥山の頂は広い平坦地があり、老人、子どもを連れた人、旅人らしい人、酒樽を担いで浮かれ踊って練り歩いている人、三味線を持った女性、日傘を差した団体、刀を差した武士など様々な人が三々五々花見をしている。茶店でくつろぐ人、サクラの下に敷物を敷いている人がいる。

隅田川の挿絵の方には、茶屋で膳の周りを楽しげに踊る姿がある。また、幾つも露店が出ており、絵の様子から子ども相手の店、赤子を背負った女性が店番をしていて近在の人が農産物でも商っているように見える店など、花見客は花見とともに露店で買い物を楽しんでいた。また、花見には家族

連れ、友人どおし、商家の団体など、何人かで連れ立って来て楽しむ人が多かった様子がうかがえる。

「江戸名所花暦」の挿絵には、幕を張って花見をしている姿は無いが、「江戸名所花暦」と同時代に出た「江戸名所図会」に品川御殿山の花見の挿絵があり、そこには定紋を染めた幕を張り、幕の中で花見客が飲食している姿が描かれている。この他同じ江戸時代後期に広重が描いた「江戸名所百景」⁵⁾は、名所を四季に分け合計119枚で構成した彩色の風景画だが、サクラの描かれている絵が20枚ある。このうち10枚は「江戸名所花暦」が紹介した名所と同じ場所で、飛鳥山の絵にはカワラケ投げを楽しむ人の姿がある。

表-2 「江戸名所花暦」に見るサクラの名所

No.	サクラの名所	種類	開花時期	場所区分	備考	現在地
1	慈眼堂	糸桜	60日目	寺境内	東叡山内	台東区
2	寒松院	〃	〃	〃	〃・山内咲初め	〃
3	等覚院	〃	〃	〃	東叡山内	〃
4	護国院	〃	〃	〃	〃	〃
5	寛永寺中堂西	イヌ桜	〃	〃	〃・大樹	〃
6	大仏辺	〃	〃	〃	〃	〃
7	四軒寺	〃	〃	〃	〃	〃
8	車阪	〃	〃	〃	〃	〃
9	山王社頭	〃	〃	〃	〃	〃
10	清水観音	〃	〃	〃	〃・裏に秋色桜	〃
11	厩谷花屋敷	彼岸桜	50日目	個人邸宅	杉田家屋敷	千代田区
12	成子乗円寺	〃	〃	寺境内	大樹	新宿区
13	寿経寺伝通院	〃	〃	〃	〃	文京区
14	大黒天	〃	〃	〃	桜多い	〃
15	正念寺	〃	〃	〃	桜の観音	〃
16	宝珠山延命寺	〃	〃	〃	〃	荒川区
17	日暮里	〃	〃	丘陵地	彼岸桜以外も多い	〃
18	木下侯庭中	〃	〃	個人邸宅	大樹	港区
19	慈眼山光林寺	〃	〃	寺境内	大樹・しだれ	〃
20	広尾の原	〃	〃	丘陵地	〃	渋谷・港区
21	牛天神	〃	〃	神社境内	桜多い	文京区
22	隅田川堤	〃	70日目頃	河川堤	桜左右より重なる	墨田区
23	隅田院木母寺	〃	〃	寺境内	大樹	〃
24	水神社	〃	70日目頃	神社境内	遊客が植栽	〃
25	新吉原	〃	毎年植栽	道路	三月朔日に数千本	台東区
26	金竜山浅草寺	〃	〃	寺境内	千本桜	〃
27	神田大明神	〃	72・3日頃	神社境内	桜多数	千代田区
28	桜馬場	〃	〃	丘陵地	柳が多い	文京区
29	天沢山竜光寺	御所桜	70日目頃	寺境内	古木大樹	〃
30	諏訪山吉祥寺	〃	75日目頃	〃	竜丁程桜並木	〃
31	白山神社	旗桜	〃	神社境内	花に旗の形	〃
32	花溪山道栄寺	〃	70日目頃	寺境内	小日向服部坂上	〃
33	長耀山感応寺	浅黄桜	〃	〃	八重桜の古木	台東区
34	慈雲山瑞林寺	〃	〃	〃	大門内左右大木	〃
35	根津権現	〃	〃	神社境内	〃	文京区
36	飛鳥山	〃	〃	丘陵地	八重一重数千本	北区
37	王子権現	〃	〃	神社境内	桜多数	〃
38	岸稻荷社	〃	〃	〃	〃	〃
39	延乗寺	右衛門桜	75日目頃	寺境内	花形大輪・香高し	新宿区
40	渋谷八幡宮	金王桜	〃	神社境内	渋谷八幡宮	渋谷区
41	三縁山増上寺	〃	70日目頃	寺境内	道筋桜多数	港区
42	御殿山	吉野桜	〃	丘陵地	古木・景勝地	品川区
43	海賞山来福寺	延命桜	78日目頃	寺境内	桜中の佳品	〃
44	西光寺	醍醐桜	〃	〃	古木・大井の桜	〃
45	元八幡宮	〃	70日目頃	神社参道	4~5丁並木	江東区
46	金井橋	吉野桜	〃	河川堤	玉川上水・大樹	小金井市

注：開花時期は立春からの日数である。



図-2 飛鳥山の花見の様子

荒川低地を眼下にして筑波山が展望できる丘陵先端ならではの楽しみだったと感じられる。また、日暮里諏訪の台や目黒元不二の絵には、遠景に筑波山や富士山があり、野外の床机で名山を展望しながらゆったりと桜花を觀賞する人たちが描かれていて、このような花見も市民に人気があったと思われる。

4. まとめ

江戸時代は行楽が盛んになり、名所の紹介本が出版された。本論は、江戸時代後期に出た「江戸名所花暦」が紹介したサクラの名所の特徴と花見の様相を考察した。

(1)「江戸名所花暦」は178箇所の名所を紹介しており、そのうちサクラの名所は46箇所、全体の約4分の1、また、春の部80箇所の半数以上を占めている。(2)サクラの名所の分布は、江戸城から5km以内が多く、北部地域に集まっている。距離が10kmを超える遠方の名所に玉川上水堤があり、泊まりがけで行く花見の名所として紹介された。(3)サクラの名所の大半は社寺境内であったが、享保年間に吉宗の命でサクラが植栽された隅田川堤、飛鳥山、御殿山などの景勝地もあり、サクラの名所は絶好の行楽地であった。(4)「江戸名所花暦」が紹介したサクラの名所は、上野や飛鳥山は現在も花見で賑わう公園であり、他にも植え継がれて存続している場所がある。(5)種類は吉野桜、彼岸桜、旗桜、山桜、浅黄桜、しだれ桜など一重八重の多くの品種が植栽されていた。(6)江戸市民は花見に小袖を新調して着飾って出かけた。サクラの木から木に幕を張り、毛氈や花むしろを敷いて飲食を楽しんだ。隅田川堤や飛鳥山には茶店があり、茶店を利用する花見客も多かった。(7)武士も一般市民も三々五々連れ立って花見をする中に、子ども連れで花見を楽しむ人もいた。隅田川堤にはこうした花見客相手の露店も出ていた。(8)筑波山や富士山が遠望される景勝地では、茶店が用意した床机でゆったりと花見を楽しむ人々も多かった。

引用・参考文献

- 1) 鈴木理生 (1988) : 江戸の都市計画、126-130、三省堂
- 2) 相関芳郎 (1981) : 東京のさくら名所今昔、138pp.、郷学舎
- 3) 東京市役所編 (1929) : 東京市史稿遊園篇第一、994pp.、(1973年の復刻版(臨川書店)を用いた)
- 4) 岡山鳥 (1827) : 江戸名所花暦、(1973年と1994年に八坂書房が活字で復刻した金井金吾校注本を用いた)
- 5) 一立齋広重 (1856) : 江戸名所百景、(1992年の復刻版(集英社)を用いた)